

2012年5月20日 マタイ2:1-12「まことの王の誕生」

明日は金環日食と聞きます。これを見逃すと、日本でみられるのは、次は300年後ということ、さすがに生きていく自信がありませんからぜひ見てみたい。300年前というと江戸時代。この摩訶不思議な天体のスペクタクルに、さぞかし大騒ぎだったことだろう。今日の記事にも、そんな摩訶不思議な天体のスペクタクルが記録されています。天空にひときわ大きく輝く星が現れて、ユダヤ人の王の誕生を示したというのです。

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになったと、今日の記事は始まっています。そのベツレヘムにいたる旅路や経緯については、マタイ福音書には書かれていませんが、ルカ福音書のほうで教えてくれています。ローマ皇帝アウグストゥスの勅令によって、ユダヤの全住民に住民登録をせよと命じられた。そこで、イエスの育ての親として選ばれたヨセフも、自分の故郷で登録しないといけない。ヨセフはダビデの末裔ですから、ダビデ家のルーツであるベツレヘムの町まで行って登録する必要があるわけです。そういうわけで、仕方なく、身重のマリアをともなって旅をする。まだあどけなささえ残るマリアと、そのおなかの子を守るようにして歩むヨセフという若い二人の姿が思い起こされる。そうして、イエスはベツレヘムでお生まれになった。そしてそれは古の預言の成就でもあったと、福音書は示しています。4-6節、メシアはベツレヘムに生まれることになっていると、これはミカ5:1の預言。

この預言どおり、ダビデの町ベツレヘムにて、イエスはお生まれになった。原文では、そのイエスとは定冠詞がついている。そのイエスとはどのイエスかといえば、21節「自分の民を罪から救う救い主」であるイエスであり、このイエスの存在こそが、インマヌエル、神は我々と共におられることを示す絶対的しるしであるとされる、そのイエス。聖書の民イスラエルが長く、長く待ち望んできた救い主。そのイエスが確かにこの世界に生まれ、地上の生涯を始められたのだと、報告している。

そのイエス様の誕生に際して、東の方から占星術の学者たちの来訪という、大変興味深い出来事があったというのです。東方の占星術の学者たち、なんともエキゾチックで、興味深い存在です。東方というのはエルサレムから見て東の方ですから、今で言うイランあたりのペルシア、バビロン、いやアラビアやインドだという人もいます。私たち日本人から見れば、ユダヤ人もペルシア人も同じに見えるが、まったく文化も宗教も違う外国人。はるばる遠くからラクダに乗ってエルサレムまで旅してきたか。占星術というとインチキ占い師のようですが、学者というほうがピッタリでしょう。天体の運行を研究して、その動きとこの世界の森羅万象との因果関係を導こうとする。おそらく古今東西のあらゆる知識に精通していた。古代社会では、こういう人たちがいわゆる賢者として、王様の政策決定に重大な助言をしたりもしていただろう。そんな賢者たちが、ユダヤ人の王が生まれたことを示す星を見た。

どんな星だったのか。あのアレクサンダー大王の誕生の夜にも、星が光り輝いて「アジアの征服者が今宵誕生した」と、天文学者たちが予言したと言われていています。それに勝るとも劣らない輝きがあったのでしょうか。実際天文学者たちは、この当時にそういう現象があったと思われる

いう。中国の古い天文学の本に、この時期七十日にわたって、異常な明るさの星を観測したとあるそうだ（新星の誕生）。あるいはこの時期に、土星と木星、また火星が合わさるといふ驚くべきことが起こったことは、計算上明らかであるようです。いずれにせよ、全宇宙の運行を支配しておられる神様による、壮大な、メシア誕生の演出がなされた。

なにより覚えていただきたいのは、この星は、旧約聖書が示しているメシア到来のしるしでもあるということです。p 256 民数 24:17 ベオルの子バラムによる託宣という形でこう告げられる「わたしには彼が見える。しかし、今はいない。彼を仰いでいる。しかし、間近にはない。ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつのしゃくがイスラエルから立ち上がり、モアブのこめかみを砕き、シエラのすべての子らの頭のいただきを砕く。」この「ヤコブの星」は、来るべきメシアを指していると、当時の人々に理解されてきました（※ラビ・アキバによるバル・コクバ（星の子）の命名が、同箇所を示唆）。おそらく博士たちは、ユダヤ人からこの希望を聞いていたのだと思われまゝ。バビロンやペルシアにはすでにユダヤ人のコミュニティがありました。そしてこの時代、ユダヤの人々の中に、様々に多様な形をとりながら、メシアの到来の期待が高まっていました。王国の繁栄をもたらすダビデの再来として、新たな出エジプトを導く第二のモーセとして・・・様々な期待。いずれにしても、罪と悲慘に満ちた悲しみの世界に、平和と喜びの支配をもたらす救い主が来てくださり、すべてを新しくしてくださる。ヤコブの星なるメシアが暗い世界を照らしてくれる。そんな希望に、ユダヤの人々は生きていた。東から来た旅人たちは、その希望を、自分の希望として受け取ったのです。そして夜空にひととき輝く星に、これこそがかのヤコブの星だと希望をかけて、エルサレムまでの遥かな旅路を決断したのです。

この彼らの熱心を覚えたい。この人たちは、まことの神についてほとんど何も知らない。聖書をろくに読んだこともない、まったく救いの外側にいた人々です。しかしそんな彼らが、救い主を待ち望む熱心ゆえに、ひとつの星を見出すことができました。それは確かに特別な星だったかもしれませんが。でも空には満天の星がきらめいていたはずで、その中にあっては、どれだけ大きく輝いていても、それを見失っていた人は多かったことでしょう。現にヘロデ王をはじめとして、ユダヤの祭司長や律法学者たちは、まったくその星に気づいていないのです。でもまったくの外側にいたはずの博士たちは見出した。

救い主に出会うことができるのは、このような人たちです。このことを今日はまず第一に覚えたい。このヤコブの星を一心に見つめた博士たちのように、ほかの光に惑わされることなく、ひたすらにまことの光イエス・キリストを見つめて求めようとする人です。そのような人であるならば、その他には何も問われません。どれだけこれまで神から離れた歩みをしてきても、聖書を知らなくても、まったく外側にいた人でも、まことの光を求める者と主は出会ってくださって、これからの道を照らしてくださるのです。この光によらなければ、私たちそれぞれの抱える深い深い闇は、決して照らされることはないのです。それが今日覚えていただきたい第一のことです。

第二に覚えたいことは、救い主イエス・キリストは、まことのユダヤ人の王、私たちの王として生まれてきてくださったということです。占星術の学者たちは、この方をまさに王の王として認

めて、最大限の敬意を表しました。11 節「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」これらの贈り物は、かつて旧約時代にソロモン王が隆盛を誇った際に、シェバの女王がたずさえてきた豪華な贈り物を彷彿とさせます。乳香も没薬も非常に高価な香料で、いずれも王にふさわしい最上の贈り物です。博士たちはこのように、自分のもつ最上の宝をささげて、生まれたばかりの乳飲み子の前でひれ伏したというのです。

このユダヤの王の到来のニュースに、ヘロデは恐れました。ヘロデ大王という人は大変有能な政治家でしたが、民衆には愛されなかった。もともとユダヤ人ではないエドム人で、ローマの皇帝に上手に取り入って、ユダヤの王との称号をもらった、偽りの王です。敵も多い、それゆえ猜疑心に満ち、親族もほとんど殺した邪悪で残忍な王として記憶されている。そんなヘロデの王朝をくつがえすまことの王の出現に対して、彼が非常に動揺している様が見て取れる。7 節を見ると、ヘロデは占星術の学者をひそかに呼び寄せて、その子のことをもっと詳しく教えてくれ、分かったら教えてくれと、知りたがる。わたしも行って拝もう、なんて嘘ばかり。見つけたら消してしまおうとたくらんでいるわけですね。あからさまな悪巧みです。こんな具合にヘロデは取り乱しています。ユダヤの人々もまた、そんなヘロデ王の取り乱しぶりに戦乱の予感を覚えて、このニュースを不安に思いました。

しかし彼らはみな肝心のことが分かかっていませんでした。救い主イエスは、単にユダヤ民族の王として、ダビデの王国を再建するために来られた王ではないのです。その支配は、天地万物におよびます。この方は、この世の君主であったサタンを掃いて、神の国、神の支配を実現するために来られた王です。そして、信じる一人一人の心を支配し、人生を支配し、愛の人へと作りかえていく王であります。この方の国には愛の法だけが存在します。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。そして、隣人を自分のように愛しなさい。」この愛の法によって、人間を支配し、この世界から失われた正しい秩序を回復する。イエス・キリストという方は、そのために到来されたまことの王であり、愛の王であります。

ただしその支配は、ヘロデやローマ皇帝のような強引な権力によるものではありません。この方はただひたすらに私たちのために仕え、極みまで愛しぬく愛をもって、私たちの目覚めを待たれます。私たちが、愛という真理に目覚めるのを待っておられる、柔和で謙遜な王であります。思い出していただきたいのは、このマタイ福音書のクライマックス、イエス様の十字架の受難。57 p、27：37 イエスの頭の上には「これはユダヤ人の王イエスである」と罪状書きを掲げた。ユダヤ人の王とはこのように、十字架の主イエスに与えられた称号なのです。東のほうから来た博士たちは、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか？」とたずねたがあります。それはいみじくも、このお生まれになった嬰兒が、やがて十字架の上でいばらの冠をかぶる王となられることを、指し示しているのです。ユダヤ人の王、この称号こそ、十字架で死ぬために生まれてきてくださった方に、もっともふさわしい称号なのです。

この方は、仕えられるためにではなく仕えるために来たと言われました。また多くの人の身代金として、自分の命をささげるために来たとも言われました。そしてまさにそのとおりに、身代

わりの犠牲として十字架に死に、私たちの罪の責任をすべて引き受けてくださいました。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは主の貧しさによってあなたがたが豊かになるためだったのです。」とパウロは言いました（Ⅱコリ 8:9）。私たちが、神のもとにある命の豊かさに到達することができるように、命のすべてをささげて、道を開いてくださったのがイエス様です。まことの王とは、そのように十字架にかけられた王であり、貧しい姿で民に仕え、重荷をになつてくださる王です。

私たちは、このイエスの十字架の愛で愛されることで、はじめて本当の愛を知るのです。その無限の愛と赦しの中に置かれて、魂は、はじめて安息を知るのです。そのようにしてイエスという王は、ただひたすらに愛して愛し抜かれて、私たちの目覚めを待っておられるのです。その目覚めは、いつどのようにして与えられるか、聖霊だけがご存知です。でも、皆さんお一人おひとりにふさわしいタイミングで、必ず愛という真理への目覚めの時が与えられます。私たちのうちには、すでにイエスの霊である聖霊が住み着いていてくださいますから、聖霊は私たちを、愛の王なる主イエスに似せていってくださいます。私たちのうちに、愛の衝動を与えてくださいます。私も愛したい。キリストが愛してくださったように、私もキリストを愛したい。そして隣人を愛したいとの沸き起こる感情が、与えられる時があるのです。

先日、一人のクリスチャンの若者からこんなことを聞きました。電車に乗っていたら、手押し車を引いたおばあさんが乗ってきた。どうも降りる駅が同じようなので、お持ちしましょうかと声をかけたら、「あ、結構です。ありがとう、おおきに」と言ってくれた。結局何もしてないけど、そのありがとう、おおきにという言葉に本当にうれしくなったとのこと。ほほえましい話。もちろんこの程度の親切はまったく大したことないものですから、愛の行いとたてまつるつもりはありません。ただ、私はその若者をよく知っていますので、彼がそのように体を動かすことができるようになったということが本当にうれしくて、感無量の思いになった。そんなことができるような子じゃなかったのです。彼は、心臓が止まるかと思うほどドキドキしたけど、思い切って声をかけてよかったと言っていた。そんな彼の成長に、私は、彼のうちに生きておられるイエス・キリストのご支配を、愛の王のご支配を覚えて、本当に感謝し、また畏れを覚えた。まことに小さな一歩ですけども、そこには罪から神へと確かに方向転換し始めた人間の姿を見ることができます。キリストに死んでいただくほどに愛されたゆえに、私もまたキリストのように生きたいと願い、自分の体や時間を、隣人のために用い始めたのです。そういう風に若者を導かれるキリストの愛に、私は感動を与えられました。

彼が言っていたように、愛するということはものすごい勇気と決断がいるものです。そして、報われないことも多いものだとは私たちは経験上よく知っている。今回は、ありがとうと言ってもらえたようですが、「失礼な結構です」「気持ち悪い」と言われることだってありましょう。誰かのために散々動き回ったのに、報われることなく裏切られることもある。だまされることもある。誰かを大切に思うがゆえに行ったことが、かえって相手を傷つけることもある。愛するということはまことに大変です。互いに愛し合えないというところにこそ、私たちの罪があります。ましてや、私たちの王様の法によれば、敵をも愛しなさいと示されます。迫害する者のために祈りな

さいと、主は言われるのです。

この王様にまともに付き合うなら、私たちは大変です。愛せない自分、罪深い自分に気づかされて、悲しむこと、嘆くことも多くなるのです。でもそれは、私たちの中に本当の愛が生まれ始めているしるしです。愛の王なるキリストが、私たちの心を支配しはじめていてくださるしるしです。私たちは、まことの愛を見失っていた罪人です。しかし、私たちのために来てくださった十字架の王が、私たちを呼び覚ましてくださいます。神を愛し、隣人を愛する喜びへと呼び覚ましてくださいます。